

海洋資源調査を水産庁から委託された 1000 トン型米式旋網漁船日本丸に、航海士で 5 ヶ月間乗船。1976 年 9 月下旬から翌年 1 月末、かけがえのない体験。

入社翌年、巻網の面白さが分かり出し、仕事に夢中。同期入社の水産高出の 2 人と、三様の夢や会社の行く末について、港々で気炎を上げていた頃。突然、社長の特命。彼らとのお別れになるとは、知らなかった。二十歳の 2 人に早くも人生の荒波。トラブルや悩みで降りたと後で聞かされ、涙がでた。

久里浜を出港し、一路南へまっしぐら。海外旋網漁業の漁場調査と潜在資源量踏査の旅。2 日目、台風対策のラッシング作業で徹夜。翌日から、極洋出身の眼光鋭く身体のシャープな漁労長は、夜明から日没まで、目もくらむ高さマストの人。

食事の時にしか降りてこない。プロの船頭の根性・執念を学んだ。

10 月 4 日、鯨付の魚群を発見した凄まじい船頭のマイク音が、船橋に響いた。海流の速いグアム南西群青の漁場。1 頭の鯨の吹き上げる潮の周りに無数の海鳥が群舞。命の饗宴に身震い。一声で総員配置。無念の大破網。いきなりビンタを食らった長い 1 日。お陰で、2 日間ぶっ通しで網修理。各人との会話が取れ、気心が通う。石巻出身の司厨士(コック長)は毎回最高の料理。気が合い、互いの非番の時に酒を持ち込み、ワッチの直前まで山ほどの話。

10 月 25 日、いよいよオーストラリアのサンゴ海漁場に入り、長期操業。2 日間、真上を何度も空軍機が旋回、舷側に急降下急上昇。領海確認に、緊張感と航海士の任務の重さを知る。11 月 30 日、食糧と清水補給の為ヌーメア入港。火炎樹の暑き街は、11 時から 14 時までシェスタの眠りの中。生物の気配と一斉の音が絶え、世界が止まる。南回帰線近くニューカレドニア島の異邦人。日暮れに繰りだし入った店は暗闇のバー。朴訥なメラネシア人が集う異質の世界。漆黒の肌で両眼が闇に白く光る。片言の会話でハポン万歳！ 何のことかと思ったら、日露戦争の話して乾杯々友達々。昼下りの殺風景な浜辺を忘却。これが天国に一番近い島だと、妙に納得・親善の一夕。